

二十世紀前半の日伊交流に関する研究

大阪芸術大学 教養課程 教授 石井元章

本研究は、1997年提出の博士論文で扱った1897年開催のヴェネツィア市国際近代美術博覧会、通称ビエンナーレ以降、太平洋戦争の終結までの日本とイタリアの美術交流を探求することを目指した。以下、順を追って概略を記したいと考える。

ビエンナーレ直後の1902年にトリノで開催された万国装飾近代美術展の企画委員会は、アール・ヌーヴォーの根本要素としての日本美術の招聘を日本政府に打診したが断られたため、日本の作家や企業に個人資格で参加を要請した（「1902年トリノ万国近代装飾美術博覧会における日本美術」『藝術文化研究』26(2018.2), pp. 1-22)。また、オーストリアの支配下にあったトリエステでは1908年頃から個人の日本美術収集家が現れた。

他方、1911年にローマとトリノで開催された万国二重博覧会には、日本政府が紆余曲折の末にイタリアで初めて参加し、狩野探幽の絵などの古美術も含む我が国の美術をも展示した。これに関しては中央公論美術出版社から近刊予定の『近代彫刻の先駆者 長沼守敬史料と研究』の中で詳しく述べた。

続く1920年代前半に、イタリア政府は日本現代美術を招聘しようと努力を続けるが、1923年の関東大震災の発生により計画が頓挫した。その後も折に触れて計画を進めようとするが実現に至らなかった。この経緯に関しては、2019年3月末にローマの外交史料館で調査したが、公刊する段階に至っていない。

ところが、ファシスト内閣に反旗を翻した軍人・政治家のエットレ・ヴィオラが、サン・フランシスコ駐箚イタリア総領事の助言に従って、1928年5月イタリア現代絵画を偶然東京三越呉服店で展示したことがきっかけとなり、1930年にローマで周知の「大倉日本美術展」が開催されることになる（「イタリア名作絵画展覧会」（1928年）とエットレ・ヴィオラの功績」『イタリア学会誌』第68号(2018), pp. 147-167)。ヴィオラのこの功績は、これまで看過されていた点であり、

注目に値する。

ファシスト内閣と関わりを強める日本政府は、日本人ファシスト下位春吉の虚言に端を発する《白虎隊顕彰イタリア記念碑》を1928年会津飯盛山に迎える。今回の研究でその記念碑を初めて実見した。この傾向は1938年に来日したファシスト内閣の使節によって東京市に寄贈された《ローマの雌狼像》（日比谷公園内に現存）や、明治神宮に植樹された真榊へと連なる。

同時期、類い稀な日本理解を示した東洋言語学者ピエトロ・シルヴィオ・リヴェッタは、すでに1910年代から多くの日本関連論考や書籍を刊行してきたが、彼の著作は1941年の『英雄的幸福の国：日本の習慣と風習』においてその頂点に達し、時を同じくして彼が主宰した雑誌 *YAMATO* において日伊交流は新たな段階を迎えたと言ってよい。もちろん彼を利用したファシストたちの行為を肯定することは到底できないが、リヴェッタの日本語能力と我が国に対する深い理解が、19世紀後半の日本美術批評家ヴィットリオ・ピーカやその他の批評家と比べて、はるかに優れていることは論を俟たない（「1940年代イタリアにおける日本文化紹介 ピエトロ・シルヴィオ・リヴェッタと雑誌 *YAMATO*」『藝術文化研究』第24号(2020年2月刊) PP.1-20)。6月の報告書は2020年3月に刊行の予定されるこの論考の抜刷を以て代えたいと考える。

以上が本研究の成果である。これを2020年中に日本語の著作にまとめ、出版することが今後の課題である。ついでこの内容と、『ヴェネツィアと日本 — 美術をめぐる交流』（ブリュッケ、東京1999年）、および『明治期のイタリア留学 文化受容と語学習得』（吉川弘文館、東京2017年）を加えた、近代日伊交流の教科書としてイタリア語で刊行する予定である。